氏　　名	**金　鍾烈（ｷﾑ ｼﾞｮﾝﾘｮﾙ）**
学位の種類	博　士（芸　術）
学位記番号	甲第 16 号
学位授与日	平成 20 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	**「煙」** **－　美術表現における「間／境界」の意味考察**
審査委員	主査　教　　授　　本　江　邦　夫 副査　教　　授　　中　村　隆　夫 副査　教　　授　　小　林　敬　生 副査　東京国立近代美術館　美術課長　中　林　和　雄

内　容　の　要　旨

私は、「煙」というものを通して、美術表現においての「あいだ/境界」というものをこの論文の主題としている。「境界」というものが、今日においてますます不明瞭なものになっていることは、あらゆる分野、領域で見ることができる。美術においてもそのような現象はすでに明らかである。しかし、多元化された主体それぞれは、新たな領域の中心となり、そこから、また新たな「境界」と「あいだ」がうまれているのである。それによって、われわれは否応なく、「あいだ」もしくは「境界」の上にいることとなる。新たな「あいだ」が重なり合うところ、もともとあった「境界」が無くなったところには、おそらく、再考しなければならない空間的関係が発生していると思われる。その空間を私は「あいだ/境界」と捉えているのである。

反復ということは、何かの意味付けが、そこにあるはずだが、何故か「煙」には何かの意味を与えることが私にはできなかった。実在のかたちを求めていたこともあり、「煙」を制作に取り入れるまでは、ある程度の時間、観察するに留めておいたのである。それから、その「煙」というものをどのように解釈し、またどのような意味付けをして来ていったかは、この論文の方向と重なるものである。

「煙」というものは、言わば「こと」を含んでいる「もの」である。しかし、自分の制作において「煙」とは、特定の「こと」をあらわすのではなく、「煙」があらわれる必然的な「こと」を含みながら、その物質的な性質をあらわしている「もの」としてあることを私は望んでいる。それらが、ある「こと」を連想させる場合もあるだろうが、自分の表現としてはあくまでもその性質に基づいて、そのものの本質に迫っていくこと

に重点をおいている。そのような試みが「煙」を通じて何かを「記述」することであると思っており、その過程は、さらに私に「煙というもの」へと注意を向けるようにしたのである。

チャールズ・サンダーズ・パースの記号学の中における「指標記号」というものは、指標的な対象としての「煙」というものの在り方を見出してくれる根拠になるのではないかと私は考えるのである。

そして、「間/境界」という空間は、明確な場所性を持っているところではない。しかし、その空間は、流動的で、可変的でありながらもある空間性を持っているものである。認識の交差、あるいは、あらゆる存在の関係で生み出される「差異」というものが「反復」するところ、その空間にそういった場所性を与えることができる。

さらに、私は「間/境界」の概念の元に「物質」としての「版」、あるいは「版」というものの正体を問いかける。ある痕跡を追っていくその行為は「版」的行為といえるのではないか。もし、そうならば、「版画」というものは、ある時のあるものの痕跡を残していくことと私は考えるのである。さらに、その周りのものは、絶え間なく変化し、かたちを変えていくだろうと思われる。「版」というものの本質も、そのような性質を持ったものであり、私において「版画」とは、変化し続ける内面の物質性による差異を持った版を反復して刷っていく過程、つまり「差異の反復」であると言える。

「煙」というものについて私は、それを「指標的なもの」あるいは「浮遊している」ものと見なしている。そのような見方は、実際の制作においても特に変わることなく、制作はその延長線上にあるものである。制作において「煙」が持った質性に従い、そのことを根本にしていることは、「煙」というものを「記述」することにおいての自分なりの方式である。そういう表現方式が自分の画面において、何か多くのことを直接的に語ることはないだろうが、「煙」が持った性質は、そして、その「かたち」は時には風の動きと共に、または、時間と共にあらわれるのであろうと思っている。